

## 論文

# 「知のダイエット」に関する試論(II)

社会福祉学部教授 村岡 潔

抄録

本稿は、大学教育や生涯教育において何を指すべきかについての考察を目的とする試論(パート II)です。方法として、前回の拙稿『「知のダイエット」に関する試論<sup>(1)</sup>』で、展開しきれなかった主題「知のダイエット」の議論を深化させるとともに、辻太一郎がその著書『なぜ日本の大学生は、世界でいちばん勉強しないのか?』<sup>(2)</sup>で提示した「勉強しない大学生」を生み出す「負のスパイラル」の構造を審議します。さらに、学生の昆虫化や知のダイエットに抗するために、インターネットでの大学の開放講座やグローバル化の事例などを加味しつつ、「学生が勉強しない構造」の三要素 {学生・大学(教員)・企業} の三者間の負のスパイラルを正に変えるにはどうするかを検討し、結論として、個人のニーズに即した現代の寺子屋式ないつでもどこでも学べるシステムの構築の重要性を指摘しました。

キーワード:

「知のダイエット」、「負のスパイラル」、インターネットの大学開放講座、寺子屋方式

留吉: ちなみにパオロさんのものさしは、なんなんですか?

パオロ: 役に立つか、おもしろいか。そのどちらかであることが、私にとっての「よい本」です。

(パオロ・マツァリーノ『13 歳からの反社会学』角川書店、107 頁、2010 年)

## I. はじめに～「知のダイエット論」再論

本稿は、大学教育や生涯教育において何を指すべきかについての試論の第 2 回目です。また、前回、本学福祉教育開発センター紀要に掲載された拙稿『「知のダイエット」に関する試論—(1) 大学教師は学生にいま何が手渡しできるか?—』<sup>(1)</sup>の続編でもあります。今回は、第 1 稿(以下、「知のダイエット(I)」)で展開しきれなかった「知のダイエット」や「昆虫化」「e 戦略と M 戦略」の議論を深化させるとともに、辻太一郎がその著書「なぜ日本の大学生は、世界でいちばん勉強しないのか?」<sup>(2)</sup>で提示した「勉強しない大学生」を生み出す「負のスパイラル」の構造を審議したいと思います。

まず、本稿では初めての読者のために「知のダイエット(I)」の要点を再掲し、「昆虫化」の意味を吟味します。筆者は、1997 年秋以来、15 年弱、本学や他大学、看護専門学校等々の教育機関で教鞭をとってきた者として「私見としての大学/生涯教育論」として「知のダイエット(I)」

を書くに至りました。

まず「知のダイエット」の定義から始めましょう。本学でも、数年前から、講義で指定する教科書を買わないで受講する学生が目立ってきました。非公式に授業アンケートをすると「テキストは買ってない」し「ノートはとっていない」とてらいもなく答える学生もいるほどです。こうした点をふまえ、「知のダイエット(I)」では、多くの学生(または学習者)が意図して学習量や質の「スリム化」を図り、「余計な勉強」は避けるようにし、しかも当事者自身は、そのことに痛痒を感じることなく自分の人生にとって有意義な選択だと確信している現象やそれに類似した現象を「知のダイエット」と定義しました。

それは、あたかも、身体のダイエット(減量法)が贅<sup>ぜい</sup>肉をとるように、資格に結びつかないような科目は「不要な贅知」として必要最小限にするようです。その教科も単位が取れる程度に勉強すればよいと考えています。「最少努力で、最大利得” Minimum Effort, Maximum Return”」の行動原理です。近年では資格や就職には必要なものが「実学」で、「教養科目」とされてきた学問(科目)は、自分にも社会にも役に立たない「贅知」とみなす傾向があります。これも「知のダイエット」なのです。

スポーツなど一芸に秀でる者を対象とする特別入試で入っている学生の中には、他の学生に比して漢字の読解力が低い者もいて、リテラシーの格差拡大を感じることもあります。ここにも「知のダイエット」の要素がみられます。無論、「知のダイエット」現象は、学生が社会の変化に対応して、それに適応・順応している姿とみなすのが妥当でしょう。

しかし、大学教育が、いやおうなしに、その都度その都度日和見的に対応する選択の仕方を続けていく生き方を是とする人間形成に向かってしまっている現在、私たち教員は、こうした「知のダイエット」化に対して、どう考え、どう対処すべきなのでしょう。か。「知のダイエット(I)」論は、こうした背景から書かれたわけです。その最後では、「昆虫化」という視点を提示しました。

昆虫化とは、知のダイエットを「昆虫型戦略」として捉えるという意味です。昆虫型戦略 entomological strategy(以下、「e 戦略」)とは、哺乳類型戦略 mammalogical strategy(以下、「M 戦略」)と対をなす概念です。これは、動物行動学の「r 戦略と K 戦略」<sup>(3)</sup>をもじって筆者が名づけたものです。

ここで、昆虫化というと「知のダイエット」をしている学生を「ばかにしているのではないか」と思われる読者がいるかもしれませんが、決してそうではありません。動物行動学を観れば、昆虫は、それ自体非常に優れた、ある意味完成された生物で、生来の能力[本能]でその場その場を判断して切り抜けていくことが可能です。あたかも非常に精巧にできた小さなロボット以上の存在です。その毎日の行動も非常に確実ですが、そのわけは関心領域以外のものは全く知覚(感覚)にのぼってこないように生来、身体構造・機能ができているからです。いわば「贅知」を自然と避けるシステムなのです。一方で、日々の行動の失敗から学ぶということはほと

んどないのです。なぜなら行動を一步間違ふことは一般に死(捕食者に食べられる)を意味することになるからです。

逆に、M 戦略では、最初は未熟で、いろいろな失敗という経験を積み重ねながら、だんだんと的確な行動がとれるようになります。大人でも失敗することはありますが、失敗は必ずしも死に結びつきません。失敗は成功の元というように、むしろ試行錯誤から多くを学ぶからです。

単純に言えば、e 戦略者は、寄り道(贅知)はしませんが、M 戦略者は、寄り道からも多くを学ぶことが可能です。つまり、M 戦略者にはこれまでのような教育システムが十分有効と言えるでしょう。一方、e 戦略者には、これまでのような教育システムは向いていないことになります。

そこで、教員ないし大学は、個々の学生の学習傾向が e 戦略なのか M 戦略なのかを弁別する必要に迫られています。なぜなら、それぞれの戦略に従って、教育プログラムを変えるべきだからです。

先述のように、元来の M 戦略者よりも e 戦略的傾向をもった学生が増えてきています。「知のダイエット」も e 戦略の一端と観れば納得できます。スマホで、関心ある情報をパッパッと、あるいはサクサクと選択して行ってあっという間に目的に到達できる昨今ですから、贅知が詰まっている教科書はいらなくてもスマホは生活必需品なのです。

例えば、社会福祉学部の4回生のゼミ(演習)を受け持っていると、その多くが、後は単位が足りているからと単位が必修のゼミしかとっていません。他の時間は言うまでもなく、アルバイトや就活・部活に充てています。教養のためにも、他の科目も登録したらと言っても、贅知科目はとりません。まさに e 戦略と言えます。その一方で「4回生はゼミしかとっていないのだから授業料を下げしてほしい」という要望すらあります。これは彼らの本音でしょう。

そこで、筆者はこうした e 戦略学生対策として、一案があります。まず、毎年まとめて一年分学費を4年間支払うのか、それとも、単位割りで支払うのかを入学時に選択させます(途中での変更は双方で可能とします)。単位割り支払いを選んだ e 戦略学生には、卒業に必要な最少単位数で4年間の全授業料を割った値段(実際は当然少し割高に)とします。その代り、全単位を修得した Semester で卒業を早期に認めることにします。早期卒業は就活にとって「優秀な学生」をアピールすることができますし、一方、そのためにはきちんと勉強して単位を取っていかないと余計に学費がかかることになります(単位を落とした場合、再登録料がかかります)。また、教員は厳格に採点して学生がきちんと勉強するように援助します。また、最少単位数より多く科目を登録すればするほど一科目の登録料(単位授業料)が割安になるようにすれば、贅知とみなしている他の科目もとるようになるかもしれません。これは、M 戦略の学生も選択するシステムともなるでしょう。

いずれにしろ、e 戦略志向学生には、例えばこのようにして、何らかの教育への感受性を高める対応策を工夫する時期に差し掛かっていると思います。

## II. 「勉強しない大学生」の「負のスパイラル」？

ここでは、前節で述べた「知のダイエット」をする e 戦略学生に関連して、辻太一郎著『なぜ日本の大学生は、世界でいちばん勉強しないのか？』<sup>(2)</sup>を紹介しつつ、特に「勉強しない大学生を生み出す負のスパイラル」<sup>(4)</sup>について検討します。

辻は、まず、日本の大学生が大学で勉強しない要因(e 戦略を採る要因)を 3 つ挙げます。

A1) 1 つは「学生」自身で、その気持ち(言い分)をこうまとめます。

「就活で、[大学の(筆者、注、以下[])は同様]成績を見る企業はほとんどない。だったら、楽に単位が取れる授業をとって面接でネタになるバイトやサークルに時間を割いたほうがいい。」

B) 2 つは「大学の先生」で、その気持ちはこうです。

「しっかり教育しようとすればするほど学生が離れていく。こんなことなら、適当にやったほうが楽だし、自分の研究に時間が使える。そもそも、学生は就活にばかり熱心だから授業に興味をもってくれないんだ。」

A2) すると学生はそれを感じ取って；

「先生がきちんと教える気がなくて、授業がつまんない！こんな授業なら、さぼってバイトやサークルに出てたほうがマシだよ。」

C) 3 つ目は企業の「採用担当者」の気持ちです。

「学生はどうせ勉強してないから、面接ではバイトやサークルの話を聞くしかないんです。」

正直、大学の先生にはもっとしっかり学生を鍛えてほしいです。」

このように次々と A1) => B) => A2) => C) => A1) を繰り返す。こうして学生がどんどん勉強しなくなっていく！こうした「負のスパイラル」が「勉強しない学生」を生み出している構造だと辻は説明します。そして、これまでのように大学生自身、大学[教師]、就活を単独で「悪者」扱いしては問題は解決しないと指摘します。

つまり、学生ばかりでなく、教師や企業の採用担当者を交えた人間同士の相互関係が今日の現象を生み出していることは、この問題が関係性の問題だとすることで納得できる点があります。教師としても、その教育に臨む態度は、学生からの反応のフィードバックに影響されるものでしょう。

確かに、現在、大学生は、どのくらい勉強しているかというと、総務省「社会生活基本調査」(2011 年)では、学業(学校での授業、及び予習や宿題など授業の準備)に使っている 1 日の時間は、高校三年生や中学三年生が平均 6 時間、小学 6 年生が 5.2 時間、に対して大学生 3.5 時間と小学生よりも少なくなっています。学業以外の学習の時間も 4 者では最低でした。いかに、日本の大学生が勉強していないかがわかります。一方、日米の大学生の比較では、日本の学生の全体の 85% が 1 週間に 10 時間以下の勉強時間(1~5 時間が 57%)なのに対し、米国では 6 割近くが 11 時間以上、約 2 割の学生は 21 時間以上勉強に費やしています。日本の学生は、言う

までもなく、その多くの時間をアルバイトやサークル、友達づきあいに費やしています。彼らは、こうした経験のほうが社会人になってから自分に大きな影響を与えると考えています。<sup>(5)</sup>

こうして本学に限らず、我が国では、「授業中」教師に質問する学生はめったにいないのでTVで有名になったサンデル教授の白熱教室のようなディスカッションにはなりません(私が2010年に参観したイタリアの2つの大学の授業でも教師と学生が盛んに討論していました。辻による聴取でも、アメリカの授業では「基本的に板書はなくて、事前に教科書に目を通し、理解しているはずの内容に関してディスカッションを行い、内容を掘り下げる」「毎回、課題が出されて、その課題を次の授業までに終えることが大変だった」ということです<sup>(6)</sup>。)

日本では教師は聴衆の学生から何か新しいヒントを受け取ることがほとんどできません(配布する白紙の紙には感想・質問は書いてくれますが、講義後に読むことになるのでLIVEの双方向授業とはなりません)。この点は、特に米国から戻った教師などには日本の大学で講義することの物足りなさを与えるようで、30年以上も前にフリーランス写真家ジャーナリストの岡村昭彦氏から聞いた話ですが、すでに東北大学で学生からの刺激がないといってまた米国に戻った教員がいたということです。

このことは、今教員となっている昔の本邦の学生もあまり熱心に勉強していなかったことを示唆していますし、辻もそう指摘しています<sup>(7)</sup>。

しかし、辻は、次に、なぜ日本の大学生は勉強しないような、あるいは勉強しなくてすむような構図になっているのか、について検討します。そして、それは学業途中からの就活などで忙しいからではなく「日本の大学生が勉強しないのは、勉強に力を入れることにメリットがないからなのです」と結論づけています。彼らは勉強していませんが、他の国の学生に比べて勉強が嫌いだからでも、怠け者だからでもないとフォローもしています。「勉強ではなく、課外活動などに力を入れるほうが、メリットが大きく、かつ楽しい」からであり、「企業の採用活動と大学の授業・評価の仕方[簡単に単位が取れる]をはかりにかけた結果、自分たちにとってもっとも効果的で、楽しいと思える行動を取っている」にすぎないというわけです<sup>(8)</sup>。ここには明らかにe戦略が示されています。

一方、辻の聞き取りでは、海外では、たとえ勉強が好きでなくても、一生懸命勉強しているのは「良い成績を取ることが、自分の将来の可能性を広げるから」であり、就職の際の応募条件、インターンシップの権利など、多くの企業が大学での成績を条件にしています。そうになると、学生は将来の自分のために真剣に授業に取り組み成績を上げておこうと考えます。多くの学生が授業に真剣になると、教師もまじめに取り組むようになり、予習をしなければついていけないような高いレベルの授業も可能になります。結果的に授業の質も高まり、学生の知的能力が自ずと高まっていくことになるというわけです。そうすると企業も大学の成績を重視するようになり、学生もまじめに授業に取り組むようになります。こうしたプロセスを辻は「正のスパイラル」としています。重要なのは「教育を受ける学生の真剣度を変えること」だとし、3

要素の「それぞれが自分の利益を最大した結果、大学生が勉強するシステム」をつくり、そして「負のスパイラル」を正のスパイラルにかえる方策を提案しています。その鍵は「考える力」を育むプログラムだとしています。<sup>(9)</sup>

しかし、考える力を育むのは、大学だけでなく、義務教育を含めた教育全体の問題であり、あるいは、幼稚園教育から、日本の教育制度を根本的に立て直す必要があるように思われます。特に、明治以来の富国強兵、殖産興業を目指していた初期からの教育内容をより生活に密着した興味のわく内容、時代に合った内容に変えていかない限り(つまり、今の大学入試の内容などはあまり面白味のないものだから)、制度や仕組みだけをいじってもなかなか考える力は育たないように思われます。

### III. おわりに～「考える力」を生み出す新たな形の模索

今は、グローバル化の時代と呼ばれていますが、19世紀にもそういったグローバリゼーションはありました。それはいわば民族国家(Nation State)や西洋医学のそれでしたが、その主体となったのは国や政府などの指導による集団レベルのものでした。それが、今では国境を超える文字通りのグローバリゼーションです。教育システムも例外ではありません。

昨年9月17日のNHK クローズアップ現代は、「あなたもハーバード大へ～広がる無料オンライン講座～」<sup>(10)</sup>というテーマでした。現在では、米国、中国、日本(遅ればせながら東大や京大)が一部の講義をインターネットのON-LINEで無料で全世界に配信するサービスMOOC(Massive Open Online Course)が生まれています(今は英語が中心ですが、将来は、いろいろな言語でおこなわれるようになるそうです)。例えば、数多あるコースから選び、半年をかけてコースを修了すると成績も付き修了証も得られます。番組では、モンゴルの青年が優秀な成績でマサチューセッツ工科大学に入学を許され奨学金ももらったという例や、パキスタンの12歳(中学3年生)の少女が相対性理論・宇宙生物学の大学のコースを修了したという例や、修了証を得たことでブラジルの青年が米国の有名なIT企業にいきなり就職できた話などが紹介されていました。企業側としても、大学の卒業証書では何が得意かわかりにくいですが、修了証だと具体的にコースがわかるので得意な分野が特定しやすいと述べていました。また、東京大学ではMOOCを今年度開始したところ、海外から優秀な留学生を迎えることができるとして、大学側にもこのシステムのメリットが大きいことを示唆していました。

MOOCはまさに通信教育の新たな形態だと言えましょう。オーストラリアなどでは、家と学校が離れているために家で衛星放送を受けるというシステムはすでに20世紀からありました。さらに、インターネットの場合ですと、個人が、それぞれの都合によっていつでもどこでもパソコンやI-Padのような端末さえあれば高等教育を受けることができるわけで、画期的な出来事が進行しているのです。

本学の通信教育課程も、時代の流れに後れをとらず、MOOCのシステムを採用すれば、対面授

業(スクーリング)にも似た形態で、わざわざ休暇をとって大学に来なくとも、より個人的で密な授業を受けられるようになるわけです(無論、従来のスクーリングや学習会もそれ独自の意義がありますが)。このように個人個人のニーズや就活にも配慮したシステムの構築は、M 戦略の学生だけでなく、e 戦略の学生にもアピールする可能性は高いはずです。

もう一つ、今年の1月18日にNHK ニュース深読み「大学入試X改革＝グローバル人材!?!」という番組<sup>(11)</sup>では、大学入学後に難しいなと大学生が感じたのは、高校と違ってプレゼンの力、自分の考えをわかりやすく筋立てて説明することだということです。これはグローバルな人材にもとめられることですが、大学側も、様々な模索を続けています。例えば、早稲田大学では、数年後、全学生を留学させる方針だということですし、また、千葉大学では、日本のことを海外に紹介する学としての「国際日本学」という講座を立ち上げています。

後者は、外国人の講師が英語で日本の文物・風物を解釈し紹介するわけですが、日本人の学生にもふだん見慣れていて気が付かない視点を学ぶことができるので好評だということです。いわゆる理系の科目の研究は通常英語で専門誌に発表されたりして世界に発信されていますが、文系は専ら日本語なので海外にはいい研究があっても届きません。それが届くようになれば、グローバル化が図られることになります。日本でも、今後は、ますます、会社や企業、大学の研究室に、様々な国の外国人が参入してくると思われます。

その中での重要な変化は、これまでは大学生(学ぶ人?)対社会人(働く人)という大きな枠組みで分割されてきましたが、これからは「社会人(などという日本分な分類)」はやめて、生涯学習・終身学生という精神でMOOCなどのインターネットでも日々学習し考え続ける人材が求められるようになってきたことです。そして、この枠組みをなくすということは大学教育(大学院も含めて)というものが単にこれまでの施設に縛られ固定化された観念ではなく、明治以降の国威発揚のためのような教育内容に縛られたものではない、新たな有形無形の制度として再編したほうが教育はより面白くなる状況にきているということです。MOOCのような新しい制度は、一度に「均一な製品としての学生」を大量生産する思想ではなく、かつての寺子屋方式のように、大学でも在宅でもそれぞれがやりたいことを学ぶ温故知新的な形なのです。

## 注記

- (1) 村岡 潔(2013)『『知のダイエット』に関する試論—(1)大学教師は学生にいま何が手渡しできるか?—』佛教大学福祉教育開発センター紀要、1-11 頁
- (2) 辻太一郎(2013)『なぜ日本の大学生は、世界でいちばん勉強しないのか?』東洋経済新報社、
- (3)  $r$  と  $K$  はロジスティック式の内的自然増加率  $r$  と環境収容力  $K$  に基づきます。 $r$  戦略とは昆虫や蛙のようにたくさんの子供をつくるがそのごく一部が生き残ればその種は滅びないという戦略です。 $K$  戦略とは、逆に、人間や哺乳類のように、少し生んで大事に確実に育てる  $M$  戦略です。

- (4) 辻、前掲書(2)、2-3 頁、115-119 頁
- (5) 辻、前掲書(2)、26-37 頁
- (6) 辻、前掲書(2)、56-58 頁
- (7) 辻、前掲書(2)、61-62 頁
- (8) 辻、前掲書(2)、77-86 頁
- (9) 辻、前掲書(2)、120-135 頁
- (10) NHK クローズアップ現代「あなたもハーバード大へ～広がる無料オンライン講座～」  
(2013 年 9 月 17 日放送)
- (11) NHK ニュース深読み「大学入試 X 改革＝グローバル人材!？」 (2014 年 1 月 18 日放送)